

聖書：マルコの福音書 12：18～27

説教題：生きている者の神

日時：2026年3月15日（朝拝）

イエス様がエルサレムに入られてからユダヤの指導者たちが次々にイエス様に挑戦する場面を読んでいます。まず最初は11章27節からで、祭司長・律法学者・長老たち、すなわちユダヤの最高法院サンヘドリンのメンバーがイエス様に挑みました。そして前回の12章13節からではパリサイ人とヘロデ党の者が手を組み、イエス様を罠に陥れようとしていました。しかし彼らはいずれもイエス様の圧倒的な知恵と権威の前に退けられました。そして今日の箇所ではサドカイ人たちが登場します。彼らは裕福な貴族階級に属する人々で、旧約聖書の律法の書、すなわちモーセ五書と呼ばれる最初の五つの書だけを権威ある書として受け入れていたと言われていました。また合理主義的な立場を取り、18節に「復活はないと言っている」と記されています。使徒の働き23章8節にも「サドカイ人は復活も御使いも霊もない」と言っていたと記されています。

そんな彼らが先に退いた人々に代わって登場します。自分たちこそイエスを打ち負かし、この宮から追い出してやろうと意気込んで来たのでしょうか。その彼らの質問は復活を否定する自分たちの立場に関わる聖書解釈の問題でした。彼らは律法の書の一つ、申命記25章5節を引用して、こう語り始めます。「先生、モーセは私たちのためにこう書いています。『もし、ある人の兄が死んで妻を後に残し、子を残さなかった場合、その弟が兄嫁を妻にして、兄のために子孫を起ささなければならない。』」これはレビラート婚と呼ばれる規定です。レビラートとは「夫の兄弟」を意味するラテン語レウィルに由来する言葉です。この規定は家の主人である夫が子を残さずに亡くなった場合、その家系を絶やさず、その家の財産を家族の中で守るためのものでした。この制度が背景となっている聖書の記事として創世記38章のユダとタマル、またルツ記のボアズとルツの物語があげられます。サドカイ人はこの規定をもとに、復活が不合理であることを示そうとして、以下のケースを想定します。20～23節：「さて、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、死んで子孫を残しませんでした。次男が兄嫁を妻にしましたが、やはり死んで子孫を残しませんでした。三男も同様でした。こうして、七人とも子孫を残しませんでした。最後に、その妻も死にました。復活の際、彼らがよくみえるとき、彼女は彼らのうちのだれの妻になるのでしょうか。

七人とも彼女を妻にしたのですが。」 本来なら二人の兄弟が登場すれば十分ですが、サドカイ人は話を大げさにするため、また面白おかしくして自分たちの主張をより強力なものとするため、わざわざ7人の兄弟を登場させます。そして言います。もし本当に復活があるなら、この女は誰の妻になるのか。7人の兄弟が天国で一人の妻を巡って争うのか。それではあまりに滑稽ではないか。だから復活などあり得ない。あまりに不合理である。そうではないですか？と。

これに対してイエス様は答えられました。まず 24 節：「イエスは彼らに言われた。『あなたがたは、聖書も神の力も知らないで、そのために思い違いをしているのではありませんか。』」 イエス様はここで彼らが思い違いをしていると指摘されます。そしてその原因は「聖書」も「神の力」も知らないことにあると言われました。彼らはまず「聖書」を知らない。サドカイ人たちは自分たちは聖書を知っていると自負していました。実際、律法の本から申命記を引用してイエス様に議論を仕掛けました。しかしイエス様は、あなたがたは聖書を本当の意味では知らないと言われます。このことについては 26～27 節で直接的に語られます。

そしてこれとセットになっているのは「神の力」も知らないということです。言い換えればサドカイ人たちは、人間の知恵と経験の範囲の中でしか物事を考えていないということです。先に述べた通り、彼らは合理主義者でした。だから先ほどのような議論になるということです。しかしそれは大きな思い違いです。復活後の世界をこの地上と同じレベルで考えていることに問題があるということです。イエス様はまずこちらから扱って行かれます。25 節でイエス様は「死人の中からよみがえるときには、人はめとることも嫁ぐこともない」と言われました。つまり天国には結婚がないということです。これは初めて聞く人にとっては少し驚きかもしれません。多くの方は結婚とは永遠の愛を誓うものであり、それは天国に行っても継続すると思っているかもしれません。しかし天国に結婚という制度はないとイエス様ははっきり語られました。確かに聖書を良く読めば結婚は地上的な制度であることが分かります。結婚の一つには「生めよ、増えよ」という神の御心が地に行われるために必要なものです。つまり出産がその一つの目的であるということです。しかし天国ではもはやその必要はありません。死ぬ人もいなければ、新しく生まれる人もいないからです。この意味で結婚という制度は天国で不要になります。

そしてもう一つ、なぜ結婚が定められたかと言えば、それは人間の孤独を癒やすためです。創世記 2 章 20 節に最初の人間アダムについて「すべての家畜、空の鳥、すべての野の獣に名をつけた。しかし、アダムには、ふさわしい助け手が見つからなかった」と書かれています。そのような状態にある人間が互いに支え合い、励まし合って生きるために神は結婚を定められました。しかし天国では、私たちは神と完全に結ばれ、十分な満たしを経験するようになるので、もはや地上的な支えは必要なくなるのです。この素晴らしい状態を指してイエス様は「天の御使いたちのようです」と言われました。私たちは神の十分な臨在と栄光にあずかり、神を近くに仰ぎ見ながら、神にあって満たされ、神を礼拝し仕えて歩むようになります。もちろん私たちが天使になるわけではありません。私たちは人間のままです。むしろ人間であることの方が、より大きな特権に生きることであるとヘブル書に記されています。ただここでは御使いがあずかっているような栄光の状態に私たちも導き入れられるということが言われているのです。

ある人は天国に結婚はないと聞いて心に不安や悲しみを覚えるかもしれません。地上でせっかく築いた伴侶との関係はどうなるのか、やがては赤の他人になるのかと寂しい気持ちになるかもしれません。しかしそうではありません。天国では地上の関係がすべて失われるのではなく、より豊かなもの、より高い次元へと引き上げられると考えられます。地上での結婚関係はある意味で排他的な関係です。特別な意味で「私だけに向けてくれる人」を持つことによって支えられるという面があります。しかし天においては神との十分な交わりによって満たされるため、地上にあった排他的な関係はもはや必要なくなるのです。神によって豊かに満たされつつ、地上で伴侶であった人に対しては地上での歩みを振り返ってより深く感謝し、さらに親しく、愛し合う関係へと導かれるのです。

ですから再婚している人がいても問題にはなりません。天国に嫉妬はありません。私たちは完全にきよめられます。従って自分とは別の配偶者がいても、むしろその人を通して与えられた支えを互いに感謝し合い、喜び合いながら生きる者とされます。独身の人もそうです。天国に入った時、地上で結婚していた人たちが親しくともに歩んでいるのを見て寂しく感じることはありません。その人も神にあって完全に満たされつつ、人々の喜びを自分の喜びとして分かち合い、同じ家族として互いに愛し合う者とされます。すべての関係が聖められ、一人一人が神にあって十分に満たされ、神

を喜びとして、互いにさらに真実に愛し合う世界が開かれるのです。まさに天の御使いたちのような世界です。

復活の状態が今の私たちには想像できないほどのものであることについては I コリント 15 章 37～44 節も参考になります。地に蒔かれる前の種粒と、そこから生えて来る実とは全く異なります。あの小さな種から、どうしてこんなに大きな実になるのか、不思議に思うほどです。同じように私たちも地に蒔かれる、すなわち死を経験し、やがて復活する時、その状態は大きく変えられます。そのことをパウロは I コリント 15 章 42～44 節で、朽ちるものが朽ちないものに、卑しいものが栄光あるものに、弱いものが力あるものに、血肉のからだが御霊のからだによみがえらされると言っています。ある意味で聖書は天国の状態をあまり詳しくは語っていません。しかし逆から言えば、この世のレベルを大きく超えるものなので、この世の言葉では十分に表現できないということでもあるのでしょう。しかし神は私たちの思いを越えて導くことができるお方です。人間の知恵や経験の範囲内で議論して得意顔になるのではなく、この「神の力」を信じ、また知る者でありたいと思います。

そしてイエス様はサドカイ人たちが「聖書を知らない」ことについて 26 節以降で語られます。ここでイエス様は彼らが受け入れているモーセ五書の中から柴の箇所を取り上げます。出エジプト記 3 章で神がモーセに燃える柴の中から語りかけられた場面です。神はそこで「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と言われました。さてなぜこの言葉が、復活を示す言葉だと言えるのでしょうか。神はここでモーセに、エジプトにいるイスラエルの民を導き出す使命を与えようとしておられました。その際、ご自身を「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と表し、契約の神であることを示されました。もしアブラハム、イサク、ヤコブがすでに死んでいたなら、この言葉に何の意味があったのでしょうか。彼らの地上の生涯の間だけ守られても最後は死んで終わりになったとするなら、モーセにとって何の励ましにもなりません。自分もいつか死んで、それで終わりということになります。しかし神が「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と言われたのは、神はご自身の契約の神であり、なお彼らをこの時も保ち、守りの内に置いておられたからに他なりません。つまり彼らはなおも生きているということです。ですからイエス様は続けて言われました。「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です。」 地上からは去った彼らも、なお神の守りの中で生かされています。そしてやがて体をもって

よみがえる時が来る。そのことが聖書から読み取れていない。あなたがたは聖書を知っているつもりでも、本当の意味では知っていない——そうイエス様は言われたのです。そして、そのために大きな思い違いをしていると言われたのです。

このようにサドカイ人の問題は聖書も神の力も知らないことにありました。ですから彼らと同じ過ちを避けるために必要なのは、その反対の道に行くことです。すなわち聖書を知り、神の力を知ることです。そしてこの二つは切り離せないものであり、そのバランスを保つことが大切だと思われます。ある人は聖書だけを知ろうと努めます。そして頭では良く知っています。しかし神の力を知らないのです。それでは本当の意味で聖書を知っていることにはならないのですが、それでも表面的には聖書を知っているように見えます。サドカイ人たちがまさにそうでした。彼らは聖書を引用して議論することができました。しかし神の力を考慮せず、人間の知恵と経験の範囲で論じるだけだったため、真理に至ることができなかつたのです。これは今日の多くの人々にも当てはまることではないでしょうか。聖書をある程度知っています。あちこち引用して論じることもできます。しかし人間の理屈に合わないことは受け入れない。それはまさにサドカイ人的な合理主義です。神の力を考慮しない聖書読みは結局聖書知らずになります。人間の議論を絶対的なものとせず、神が働かれるならどんなことも起こり得るといふ余地を私たちは心に残しておくべきです。人には不可能なことでも、神にはできないことは何もありません。

一方で「神の力」ばかりを強調し、聖書から離れてしまう危険もあります。これもまたバランスを欠いた姿です。神には何でもできると言っ、自分の想像を膨らませ、独りよがりとなり、聖霊は風のように吹くという御言葉を都合良く解釈して、本当にどこへ飛んで行ってしまうか分からない状態になる人がいます。その結果、健全な教えや教理から離れ、ついにはキリスト教の信仰から外れてしまう。ですからバランスが必要です。聖書に良く耳を傾けながら、同時に、その聖書で語られている通りに働く神の力に信頼して生きることです。そのように歩む時、私たちの前には素晴らしい希望の世界が開かれます。聖書は今日の箇所、先に召された聖徒たちが今日も生きていて教えています。私たちにもそれぞれ、思い起こす人々がいるでしょう。先に天に送った伴侶、家族、友人、恩師、教え子、・・・その他、様々な地上を去った愛する人たちのことを思うでしょう。その人たちについて今日の御言葉が語るのは、その人たちはただ死んで地上からいなくなったのではないということです。神は「生きて

いる者の神」です。神はその慈しみの御手の中で、その方々を今日も守り、生かしておられます。そしてやがて定められた日に、復活の恵みに導いてくださいます。

そしてこれは、今地上に生きている私たちにとっても大きな希望です。私たちもやがて地上の生涯を終え、死を迎えます。日ごとにその日に近づいています。しかしいつその日を迎えたとしても、「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」とご自身を示された契約の神は、この契約により頼む者を同じように死を越えても守り、生かしてくださいます。「生きている者の神」として、私たち一人一人を、その命の中に保ってくださるのです。そしてその先に備えられているのは言葉では言い尽くせない素晴らしい世界です。今日、私たちはその一端を垣間見せられました。天で私たちは地上的なあらゆる弱さから解放され、神との完全な交わりに満たされます。そこに集う者たちは悲しみ嫉妬もなく、主の救いを心から喜びつつ、互いに真実に愛し合って生きます。それは天の御使いたちのような状態です。神はご自身により頼む者のために、このような祝福を備えておられます。サドカイ人のように復活はないとして、この世のことだけに心を向けるのではなく、神が備えておられるはるかに素晴らしい世界を見上げ、希望をもって歩む者でありたいと思います。そのために、「聖書」を益々知り、また「神の力」を信じて歩む、この祝福の道を最後まで堅く進んで行きたいと願います。